

## -2 メディア・情報行動2(青少年)

# 高校生世代における携帯電話・スマートフォンの利用に関する調査分析 普及時期別ならびに地域別の推移・比較

## A Comparative Study of Use Mobile Phones and Smartphones Among the the High School Students.

毛利康秀<sup>1</sup>

Yasuhide MOHRI

<sup>1</sup> 日本大学文理学部 Nihon University, College of Humanities and Sciences

**Abstract** This paper summarizes the results of a study on how mobile phones and smartphones are used among high school students in Japan, and have what are their impacts on human relations. It is estimated that the use of mobile phones and smartphones exerts major effect of interpersonal relationship among them, and the following results was reached that use of it differs from by region and generation.

**キーワード** 高校生, 携帯電話, PHS, スマートフォン, コミュニケーション

### 1. はじめに

日本における2013年2月末時点の携帯電話（PHS、スマートフォンを含む）の契約数は1億3516万8600件となっており、契約数ベースでは日本の全人口を上回る数にまで達している<sup>(1)</sup>。2013年3月末時点での100世帯あたりの使用台数も234.9台となっており、この数値は近年ほぼ変わらないことから、普及は既に上限に達していると判断出来る<sup>(2)</sup>。幼児や高齢者を除けば、携帯電話は「1人1台」の時代が実現していると言えるだろう。2007年以降はスマートフォン（スマホ）の普及も進み、従来型の携帯電話からの置き換えが進行している。時代の流れは「ケータイ」から「スマホ」へと急速に変遷しつつある<sup>(3)</sup>。

携帯電話はビジネス用途での利用から普及が始まったが、プライベートなコミュニケーションや友人関係にも大きな影響を及ぼすメディアである。1990年代の後半以降、このプライベートな部分に着目し、携帯電話の利用がコミュニケーション行動や人間関係にどのような影響を与えるかについての調査研究が盛んに行われた。例えば、松田（1998）による「選択縁<sup>(4)</sup>」や、辻（1999）による「フリッパー＝切替指向<sup>(5)</sup>」、中島ほか（1999）による「フルタイム・インティメイト・コミュニティ<sup>(6)</sup>」、中村（2003）による携帯メールにおける「コンビニ人間関係<sup>(7)</sup>」など、携帯電話を介した特有のコミュニケーション形態のモデルが提示されている。若者世代を対象とした携帯電話の利用に関する調査研究は引き続き行われており、辻（2006）による人間関係での不安感と携帯メールに関する研究<sup>(8)</sup>や、下田（2008）による学校裏サイトなど携帯・ネット利用による負の側面に焦点を当てた研究<sup>(9)</sup>、吉光・河又（2009）によるケータイ・ネット社会における安心・安全に関する研究<sup>(10)</sup>など、若者世代の携帯電話利用とネットワークに関する問題点と対策に関する研究の幅が広がっている。

携帯電話は、人々のコミュニケーションへの欲求に応えられるメディアであり、特にインターネットへの接続が容易になってからは、松下（2012）が指摘するように「絶え間なき交信」を一日中「いつでも、どこからでも」様々な形態で行えるようになっている<sup>(11)</sup>。連絡先の相手を仲間という言葉に置き換え、時間と空間を組み合わせると考えれば、携帯電話は時間・空間・仲間の「三間」を有効に配分することで友人関係を「より広く」維持していく特性を持つと同時に、「より深く」親密な関係を築いていく特性を同時に併せ持つメディアである、ということも出来るだろう。

さて、これらの先行研究で示された知見は、携帯電話が普及途上の時期に調査・分析され提示されたものが多いが、それらは十分な普及が進んだ時期以降のコミュニケーション形態にも適用可能なのであろうか。近年は無料または廉価で通話やメールの交換（あるいは文字メッセージの交換）が可能なアプリケーションソフト（アプリ）の普及が進んでおり、その中でも「Skype」や「LINE」が利用者数を伸ばしているなど利用環境が大きく変わりつつある。これらの変化は、携帯電話やスマートフォンの使いこなしをどのように変化させ、コミュニケーション形態や人間関係の構築・維持にどのような影響を及ぼしているのだろうか。特に、高校生を中心とする若い世代についてはどのような違いがあるのだろうか。

この問題を検討するには、携帯電話が普及途上の時期に実施された利用実態調査を採り上げ、これと可能な限り条件を合わせた調査を一定期間おきか実施し、それらの結果を比較することが有効であると考え。筆者は、1998年度から首都圏ならびに地方圏に立地する同一の高校を対象として携帯電話の利用実態に関する事例調査を継続的に行っており、過去の結果と最新の調査結果を比較することによって、地域別・世代別の比較・検討を試みることにした。

## -2 メディア・情報行動2(青少年)

### 2. 調査方法

調査対象：日本大学付属高等学校 2校（同一高校で入学・卒業年度の異なる1学年全員）それぞれ首都圏と地方都市にあり、本稿では以下のように表記する。

首都圏校：首都圏に立地している高校  
地方高：地方都市に立地している高校

対象世代：本稿では3つの世代を対象とし、入学年を基準として以下のように表記する。1998年世代は携帯電話の普及途上期にあたり、2004年世代以降は成熟期にあっている。

1998年世代...1998年4月高校入学、2001年3月卒業  
2004年世代...2004年4月高校入学、2007年3月卒業  
2010年世代...2010年4月高校入学、2013年3月卒業

調査時期：それぞれ高校3年在学時の秋～冬に実施。

1998年世代：2000年9月  
2004年世代：2006年12月  
2010年世代：2012年11月

調査方法：アンケート用紙の配布による自記式調査

有効回答数：回収分のうち無効票を除外した有効回答数ならびに在籍者に対する回答率は以下の通りである。

		1998年世代			2004年世代			2010年世代		
		在籍数	有効数	%	在籍数	有効数	%	在籍数	有効数	%
首都圏校	男子	357	324	90.8%	233	180	77.3%	228	206	90.4%
	女子	216	210	97.2%	310	277	89.4%	233	212	91.0%
地方校	男子	476	421	88.4%	428	348	81.3%	324	284	87.7%
	女子	166	153	92.2%	234	198	84.6%	150	140	93.3%

調査項目：携帯電話（PHS、スマートフォン）の利用状況、頻度・回数、友人数、利用の意識について等（2010年世代については、SkypeやLINEなどアプリの利用状況についての項目も追加した。）

### 3. 調査結果の概要

調査時点における携帯電話（PHSとスマートフォンを含む、以下同じ）の利用率は<表1>のようになった。世代が下がるほど利用率は高く男子より女子の利用率の方が高くなっている。2010年世代では女子は回答者の全員が利用していたが、男子は両校とも5名ずつ「利用していない」と回答したことには留意する必要がある。地域別の差は特になかった。

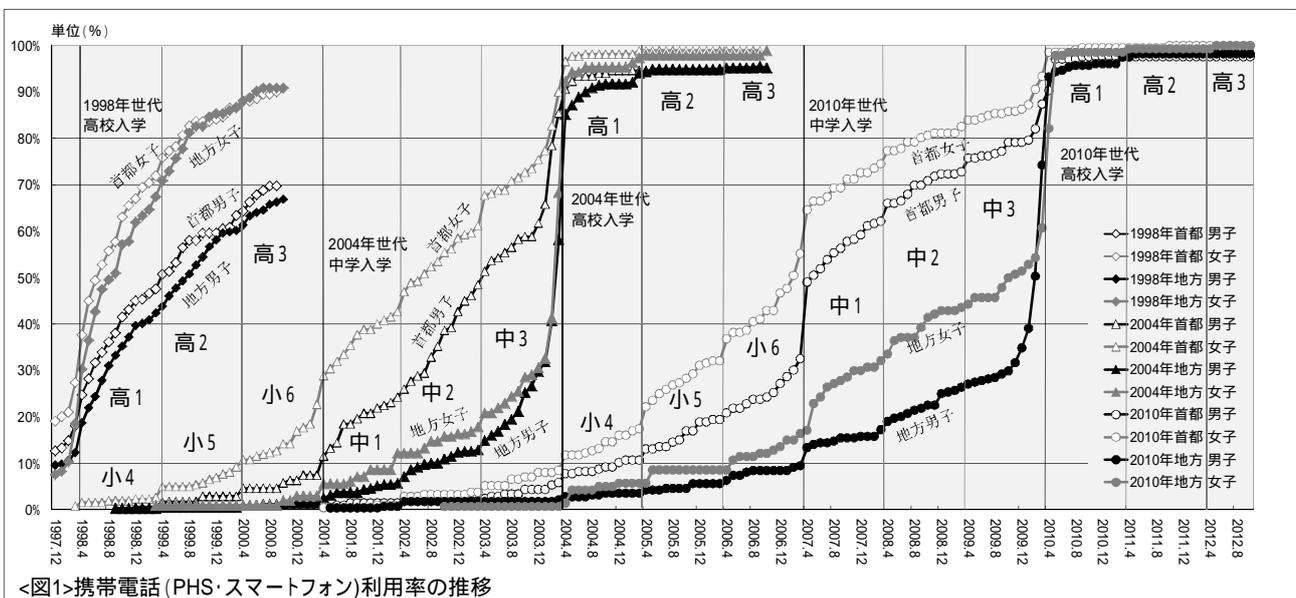
<表1>携帯電話(PHS・スマートフォン)の利用率(%)

		1998年世代			2004年世代			2010年世代		
		回答数	利用数	%	回答数	利用数	%	回答数	利用数	%
首都圏校	男子	324	226	69.8%	180	171	95.0%	206	201	97.6%
	女子	210	189	90.0%	277	273	98.6%	212	212	100.0%
地方校	男子	421	279	66.3%	348	333	95.7%	284	279	98.2%
	女子	153	142	92.8%	198	194	98.0%	140	140	100.0%

なお、2010年世代ではPHSの利用はなく、携帯電話とスマートフォンの利用比率は以下のようになっている。首都圏校の女子のスマートフォンの利用率の高さが際だっており、8割を超えている。

首都圏校男子 携帯36.3% スマートフォン63.7%  
首都圏校女子 携帯19.8% スマートフォン80.2%  
地方校男子 携帯45.5% スマートフォン54.5%  
地方校女子 携帯43.6% スマートフォン56.4%

初めて携帯電話を利用し始めたのはいつかについて質問し、携帯電話の利用率がどのように上昇していったかを時系列に集計してグラフに表すと<図1>のようになった。このグラフを見ると、世代が下るほど初めて使い始める時期が早くなっている、女子の方が早く使い始めている、首都圏校の方が早く使い始めている、といった傾向を見いだすことができる。まだ携帯電話が普及途上にあつた1998年世代では、高校入学時点で使っている生徒はまだ少数派であり、入学してから緩やかに利用率が増えていったが、2004年世代以降では、



## -2 メディア・情報行動2(青少年)

&lt;表2&gt;通話機能の1日平均利用回数・分数

通話機能		1998年世代			2004年世代			2010年世代		
		回数	分数	1回あたり	回数	分数	1回あたり	回数	分数	1回あたり
首都圏校	男子	6.3回	15.8分	2.5分	2.5回	8.5分	3.4分	2.4回	27.9分	11.6分
	女子	4.0回	19.6分	4.9分	1.9回	16.4分	8.6分	2.3回	28.1分	12.2分
地方校	男子	6.3回	21.7分	3.4分	2.1回	13.6分	6.5分	2.6回	20.4分	7.8分
	女子	5.1回	35.0分	6.9分	2.5回	13.6分	5.4分	1.7回	15.6分	9.2分

&lt;表3&gt;メール機能の1日平均利用回数・分数

メール機能		1998年世代			2004年世代			2010年世代		
		回数	分数	1回あたり	回数	分数	1回あたり	回数	分数	1回あたり
首都圏校	男子	17.3回	20.6分	1.2分	21.4回	39.4分	1.8分	42.0回	73.2分	1.7分
	女子	18.3回	29.4分	1.6分	28.8回	60.7分	2.1分	59.3回	84.1分	1.4分
地方校	男子	12.7回	21.7分	1.7分	25.3回	47.7分	1.9分	37.5回	58.6分	1.6分
	女子	14.5回	35.0分	2.4分	31.5回	83.2分	2.6分	49.7回	59.1分	1.2分

高校入学時時点でほぼ全ての生徒への普及が完了している。地域別に見た場合、首都圏校においては中学校の在学時から高い利用率となっているのに対し、地方校では利用率の伸びは緩やかであり、中学卒業から高校入学時に急激に上昇している。この傾向は2010年世代においても同様である。

1日あたり平均通話回数および通話時間は<表2>のようになった(2010年世代は、通話可能なアプリを利用した通話も含めている)。おおよその傾向として、世代が下ると通話の回数は減少するが通話1回あたりの時間は増加していること、特に2010年世代では大幅に増加していること、男子より女子の方がよく利用していることなど読み取れる。2010年世代で通話時間が大幅に伸びている理由としては、利用料金プランの選択の問題のほか、通話が可能アプリの普及と利用が進んでいることが大きい(2010年世代のアプリ利用の詳細は後述する)。

1日あたりのメール機能の平均送受信回数およびメール時間は<表3>のようになった(メールの時間は、送受信および文面作成のために必要な時間を含み、アプリを用いた文字メッセージ交換の時間・回数も含めている)。おおよその傾向として、メールを送受信する回数ならびに時間は増加傾向にあること、メール1回あたりの時間はあまり変わっていないこと(ただし、2004年世代以前の地方校女子はメール1回あたりに2分以上かけていたが、2010年世代では半減している)が読み取れる。これもメールや文字メッセージの交換が可能アプリの利用機会の増大が影響しており、特にLineなど短いメッセージが多数交換される「会話のような使い方がなされる」アプリの多用が平均を押し上げる大きな要因となっている(2010年世代の利用について、こちらの詳細も後述する)。

1ヶ月あたりの平均的な利用料金は<表4>のようになった(利用料金は基本料金を含んでいる)。料金体系は時期によって大きく異なり、利用している電話会社による違いや、契約している料金プランによっても違いがあるために単純な比較は出来ないが、「地方校の方が高めであること」「男女ではあまり違いがない」傾向を読み取ることが出来る。

2010年世代は、2004年世代と比較して金額が抑えられているが、これは定額で使い放題の料金プランの活用で極端な高額になることが避けられるようになっていたり、無料で通話やメールが出来るアプリの利用が増えている等の要因が推測される。いずれにせよ、高校生世代として支払いが可能な金額(保護者が許容出来る金額)には一定の上限があり、それは7000~8000円前後の水準にあると考えられる。

&lt;表4&gt;月々の利用料金(円)

		1998年世代	2004年世代	2010年世代
首都圏校	男子	6,724円	7,349円	6,597円
	女子	6,027円	7,411円	6,770円
地方校	男子	8,294円	7,976円	7,218円
	女子	8,310円	8,642円	7,833円

アドレス帳について、中学校卒業時、高1終了時、高2終了時、高3の調査時における登録人数について質問し、その推移を集計したところ<表5>のようになった(ただし、過去の登録人数については記憶に基づく概数であることに留意する必要がある)。全体的に、学年が上がるにつれて登録人数も増加していく傾向が見られる。他にも地方校より首都圏校の方が登録数が多めであり、男子より女子の方が登録数が多めであり、といった傾向が見受けられる。業務的な使用をほとんど行わない高校生世代にとって、アドレス帳は基本的にプライベートな人間関係の範囲を反映していると判

&lt;表5&gt;アドレス帳への登録人数(人)

		1998年世代				2004年世代				2010年世代			
		中3	高1	高2	高3	中3	高1	高2	高3	中3	高1	高2	高3
首都圏校	男子	-	58.1	79.2	85.0	57.7	76.5	91.3	104.8	67.4	79.4	94.1	106.1
	女子	-	53.7	89.7	94.3	78.1	103.4	123.6	145.0	71.3	91.1	108.4	122.6
地方校	男子	-	50.5	89.5	92.2	35.2	59.9	79.6	85.1	42.7	64.5	78.0	88.7
	女子	-	57.6	88.6	82.0	39.7	72.6	89.6	104.4	47.1	68.1	78.4	86.8

&lt;表6&gt;親しいと感じる人数(人)

		1998年世代				2004年世代				2010年世代				
		中3	高1	高2	高3	中3	高1	高2	高3	中3	高1	高2	高3	
首都圏校	男子	友人数	-	22.0	18.5	15.7	41.1	56.2	69.2	56.8	48.2	58.8	72.8	74.1
		(親友)	-	-	-	-	5.5	5.7	7.0	7.8	6.2	7.2	8.6	10.9
	女子	友人数	-	14.4	11.9	15.2	51.3	67.0	83.1	59.7	43.9	54.3	65.9	65.6
		(親友)	-	-	-	-	4.2	5.6	6.9	8.0	3.6	5.3	6.4	6.8
地方校	男子	友人数	-	28.4	16.8	17.0	42.6	50.0	68.4	61.6	44.1	58.3	74.6	65.6
		(親友)	-	-	-	-	8.5	8.3	11.1	8.6	6.0	8.1	10.1	10.3
	女子	友人数	-	23.5	13.8	11.7	41.3	53.8	62.2	55.6	33.0	40.0	45.8	48.4
		(親友)	-	-	-	-	3.5	4.1	4.8	5.1	2.9	3.3	3.7	4.8

## -2 メディア・情報行動2(青少年)

断出来るので、高校生が維持することの出来る平均的な人間関係の範囲は、およそ80名～100名前後の水準にあると考えられる。

親しいと感じる人数について質問し、その推移を集計したところ<表6>のようになった(ただし、こちらも過去に親しいと感じていた人数については記憶に基づく概数であることに留意する必要がある)。世代が下がるほど親しいと感じる人数が増加していることが

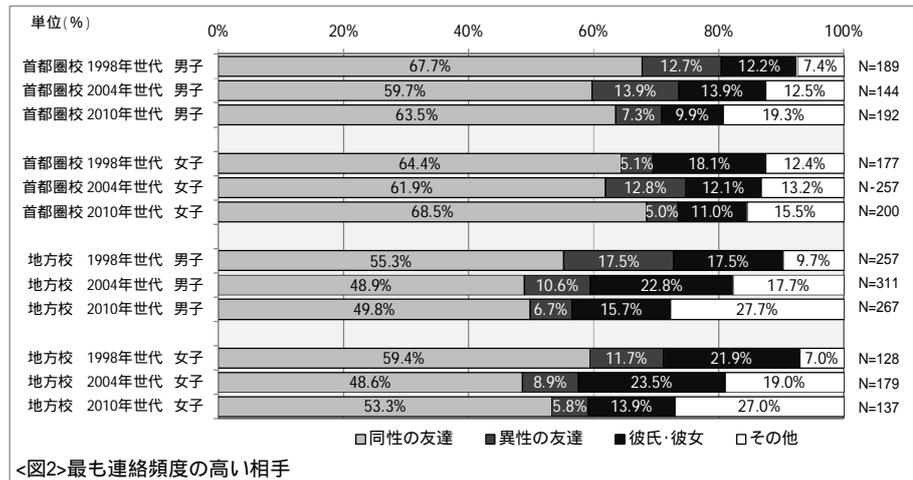
分かる。また、アドレス帳に登録されている人数の推移と、親しいと感じる人数の推移との間で相関をとると、携帯電話の普及期にあたる1998年世代は負の相関(-0.69)が見られるのに対し、成熟期以降にあたる2004年世代と2010年世代は正の相関(+0.72と+0.71)が見られることから、普及時期の違いによる意識の変化があるものと判断出来る。すなわち、1998年世代はある程度親しくなった相手だけを"友達"として認識しているのに対し、後の世代においては"友達"と認識する親密度の敷居が低くなっている。成熟期以降は、同世代のほぼ全員が携帯電話を持っており、アドレス帳への登録も容易に出来る状況になっていることから「親しいと感じる範囲」も拡大したと考えられる。

落合・佐藤の研究によると、高校生はもともと「広く深く付き合う」友人関係を志向する時期ではあるが、次第に友人の範囲が絞り込まれていくという<sup>(12)</sup>。1998年世代は、その傾向に沿って親しみを感ずる人数が減少傾向にあるが、2004年世代と2010年世代は、高校入学後もしばらく増加し続けており、高校3年時点になってようやく鈍化ないし減少に転じている。

これは、携帯電話の普及が完了した時期以降においては、アドレス帳に登録した相手には親しみの感情が付与されることによって"友達"として認識され、親しみの感情が付与されやすくなっているのではないだろうか。また、その後の付き合いが疎遠になっていったとしても、アドレス帳にリストが残っている限りは、やはり"友達"として認識されたままになっているため、親しみを感ずる人数が減りにくいのではないかと、という仮説を提示することが出来る。

なお、2004年世代と2010年世代については、親友と考えている人数についても質問しているが、男女や地域の違いはなく一貫して増加し続けている。

最も連絡頻度が高い相手は誰であるかについて質問すると、<図2>のようになった。世代に関わらず「同性の友達」が最も多くなっているが、世代が下るにつれて「その他」の割合が増加しつつある傾向が認められる。ここでいう「その他」には、同じ学校ではない相手、例えばインターネット上で知り合った相手があ



る程度含まれていると考えられる。

落合・佐藤の研究によると、(同じ学校の)同性の友人とのコミュニケーションが多いのは、いわゆる中学生的な付き合い方であるとされ、高校生になると異性との交際を始めとして、同性の友人以外とのコミュニケーション機会が増加するという。「その他」の割合が増えているということは、より早く中学生的な付き合い方を「脱する」傾向が進んでいるという仮説も提示出来る。この部分の詳細を明らかにしていくことは、今後の検討課題である。

### 4. 2010年世代における利用状況

以上、携帯電話の基本的な利用状況について、地域別、男女別、世代別に比較・検討を行ってきたが、ここで最新の2010年世代における携帯電話(スマートフォン)の利用状況についてまとめてみたい。

携帯電話の1日あたりの平均的な利用時間について質問し、通話全体、メール全体、その他で利用しているサービスや機能全体の別に集計すると、<表7>のようになった<sup>(13)</sup>。これによると、首都圏校では男女とも1日あたり4時間以上使用しており、地方校も3時間半前後に達している。

通話とメール機能の利用の詳細について質問し、回答者の平均について集計すると<表8><表9>のようになった<sup>(14)</sup>。これによると、Skypeを利用している者は通話時間が長い傾向があり、LINEを利用している者はメールや文字メッセージを送受信する回数が多くなる傾向が認められる<sup>(15)</sup>。通話やメール(文字メッセージの交換)の利用機会が多い生徒の間では、これらのアプリがよく利用されていると判断することが出来る。

<表7>携帯電話の1日平均利用回数・分数(2010年世代)

	首都圏校		地方校	
	男子	女子	男子	女子
通話全体	2.4 回 27.9 分	2.3 回 28.1 分	2.6 回 20.4 分	1.7 回 15.6 分
メール全体	42.0 回 73.2 分	59.3 回 84.1 分	37.5 回 58.6 分	49.7 回 59.1 分
その他全体	154.5 分	176.3 分	128.4 分	136.7 分
合計	255.6 分	288.5 分	207.4 分	211.4 分
	N=201	N=212	N=279	N=140

## -2 メディア・情報行動2(青少年)

&lt;表8&gt;通話機能の利用詳細(2010年世代、回答者の平均)

2010年世代	首都圏校		地方校	
	男子	女子	男子	女子
電話	1.2 回 7.3 分 N=173	1.1 回 10.7 分 N=159	1.4 回 7.6 分 N=247	1.1 回 7.2 分 N=124
LINE	0.4 回 4.7 分 N=76	1.4 回 16.4 分 N=85	1.0 回 9.9 分 N=101	0.6 回 10.4 分 N=44
Skype	0.6 回 49.8 分 N=38	0.5 回 18.7 分 N=32	1.3 回 21.6 分 N=44	0.9 回 30.0 分 N=5
その他アプリ	4.3 回 11.7 分 N=9	0.6 回 14.0 分 N=10	0.8 回 13.4 分 N=17	2.5 回 15.0 分 N=2

&lt;表9&gt;メール機能の利用詳細(2010年世代、回答者の平均)

2010年世代	首都圏校		地方校	
	男子	女子	男子	女子
メール	11.6 回 22.1 分 N=165	9.8 回 28.6 分 N=171	12.8 回 32.4 分 N=242	13.3 回 30.5 分 N=115
LINE	51.4 回 85 分 N=105	65.7 回 74.8 分 N=143	51.0 回 51.2 分 N=110	67.1 回 54.8 分 N=65
Skype	3.6 回 7.7 分 N=31	3.2 回 8.4 分 N=30	2.1 回 4.7 分 N=38	0.3 回 1.0 分 N=4
その他アプリ	2.0 回 10.0 分 N=10	22.2 回 40.3 分 N=15	2.3 回 6.7 分 N=22	5.0 回 11.3 分 N=4

インターネット上では携帯電話やスマートフォンで利用可能な様々なサービスが提供されているが、それらをどのくらい利用しているかについて質問してサービス別に集計したところ、<表10>のようになった<sup>(16)</sup>。これによると、全体的にみて動画サイトの利用者が最も多く、LINEの利用が続いている。LINEのサービス開始が2011年6月であることを考えると、高校生世代へのLINEの浸透の速さは驚異的である。

その他のサービスとしては首都圏校においてTwitterの利用が比較的高く、男子はMobageやGREEなど主にゲームで遊べるサービスの利用者数が多く、女子はブログのサービスの利用が多いなど、性別による相違も認められる。

&lt;表10&gt;利用しているサービス(2010年世代)

	首都圏校		地方校	
	男子	女子	男子	女子
LINE	123 61.2%	169 79.7%	138 49.5%	81 57.9%
Skype	55 27.4%	54 25.5%	65 23.3%	13 9.3%
動画サイト	134 66.7%	144 67.9%	178 63.8%	104 74.3%
Twitter	113 56.2%	148 69.8%	110 39.4%	66 47.1%
Mobage	50 24.9%	23 10.8%	92 33.0%	32 22.9%
GREE	56 27.9%	23 10.8%	89 31.9%	22 15.7%
mixi	97 48.3%	82 38.7%	85 30.5%	37 26.4%
ブログ	40 19.9%	115 54.2%	69 24.7%	80 57.1%
Facebook	35 17.4%	61 28.8%	51 18.3%	24 17.1%
プロフ	5 2.5%	17 8.0%	25 9.0%	30 21.4%
その他アプリ	69 34.3%	91 42.9%	100 35.8%	52 37.1%
	N=201	N=212	N=279	N=140

通話とメール以外のサービスをどのくらいの時間利用しているかについて質問し、回答者の平均について集計したところ、<表11>のようになった。音楽の試聴やワンセグの利用など、インターネット上のサービス以外の利用時間についても質問した。これによると、

音楽の試聴やワンセグの試聴が上位に入り、首都圏校ではその他(インストール済みアプリの利用が多い)も目立っている。インターネット上のサービスでは、TwitterやMobageなどの利用時間の長さが目につき、ホームページの閲覧時間も長くなっている。今日の携帯電話(スマートフォン)は、音楽プレーヤーや小型テレビとして、そして小型パソコンとしての利用がなされており、かつ複数の機能を同時に利用する使い方が日常化していると言える。

&lt;表11&gt;各種サービスの利用時間(2010年世代、回答者の平均)

	首都圏校		地方校	
	男子	女子	男子	女子
動画サイト	62.3 分 N=105	54.4 分 N=116	38.5 分 N=148	43.1 分 N=87
Twitter	52.0 分 N=105	80.1 分 N=137	66.6 分 N=93	42.4 分 N=60
Mobage	37.8 分 N=39	25.6 分 N=13	51.4 分 N=48	36.5 分 N=22
GREE	35.2 分 N=32	16.0 分 N=7	46.1 分 N=43	18.3 分 N=10
mixi	14.6 分 N=61	7.4 分 N=49	15.9 分 N=57	11.8 分 N=25
ブログ	30.0 分 N=31	22.4 分 N=90	15.7 分 N=48	27.4 分 N=66
Facebook	9.7 分 N=23	13.4 分 N=48	20.1 分 N=30	6.6 分 N=14
プロフ	5.2 分 N=6	6.3 分 N=20	5.9 分 N=9	6.6 分 N=11
HP閲覧他	59.6 分 N=61	65.4 分 N=69	44.1 分 N=77	65.5 分 N=44
音楽	69.4 分 N=71	59.6 分 N=85	56.9 分 N=107	60.4 分 N=60
ワンセグ	30.6 分 N=13	66.2 分 N=17	50.9 分 N=38	65.5 分 N=19
その他	85.1 分 N=11	94.2 分 N=9	28.4 分 N=17	17.0 分 N=3

## 5. まとめ

かつての携帯電話は文字通り「移動式の電話」であり、外出先での通話のための道具であったが、普及が進んだ以降の携帯電話は、通話・メールはもちろん、インターネットへの接続機能を搭載した多機能情報端末という位置づけとなり、スマートフォンの登場によって、その流れは確固たるものとなった。携帯電話はもはや通話をメインとしたツールではなくなり、高校生世代においても一時は通話の時間が減少したが、近年はLINEやSkypeに代表される通話が可能なアプリの登場と普及により、通話の時間が再び上昇傾向にある。最新の調査では「アプリを利用した通話の復活傾向」が明らかになったと言える。

メールの利用は引き続き活発で、特にLINEを用いたメッセージの交換は、文字を用いた「会話」のようであり、やりとりの回数と時間を大きく押し上げている。こちらも「アプリを用いたメールのやりとりの更なる促進傾向」が明らかになった。

利用開始時期については、地域による差が認められた。首都圏校では中学時代から7割~8割の生徒が使っているのに対して、地方校では2割~4割の利用にとどまっている。現在、首都圏校では中学入学時から利用が急上昇するが、地方校では高校入学時からとなっている。この地域による差異は今後解消されていくのか、引き続き残っていくのか、今後注目していきたい。

利用料金については大きな変化は見られなかった。高校生世代(正確には高校生世代の保護者世代である)が1か月に負担することが出来る金額には一定の水準があることを示唆している。

アドレス帳の登録人数は増加傾向にあり、地域別、

## -2 メディア・情報行動2(青少年)

男女別の差異が認められた。親しいと感じる範囲についても増加傾向にあり、特に親しく「親友」と認められる人数も増加の一途を辿っている。携帯電話は人間関係を「より広く」「より深く」する特性を持っているが、高校生世代においても、人間関係の拡大・維持のためのコミュニケーションツールとして使いこなしている実態が浮かび上がった。

今後も若者世代に着目して調査研究を進め、携帯電話やスマートフォンの利用が前提となった人間関係やコミュニケーションのあり方について一層の考察を深めていきたい。

## 補注

- (1) 一般社団法人電気通信事業者協会が発表した事業者別契約数より。うち携帯電話は1億3,013万件、PHSは503万件であり、どちらも前月より微増している。  
<http://www.tca.or.jp/database/2013/02/>
- (2) 内閣府「消費動向調査」2013年3月末現在の発表より。総世帯に対する普及率は95.0%となっており、普及率はほぼ上限に達していると考えられる。  
<http://www.esri.cao.go.jp/jp/stat/shouhi/shouhi.html>
- (3) 株式会社MM総研の集計によると、2012年度のスマートフォン契約数は4,337万件で携帯電話契約数の37.2%を占めており、2014年度にはスマートフォンの出荷台数比率が80%を超えると予測している。  
<http://www.m2ri.jp/newsreleases/main.php?id=01012013032>
- (4) 「選択縁」とは、話す相手を意識的に選択し、選べる縁を一層選択的に選び抜いた関係である。
- (5) 対人フリッパーとは、対人関係に全面的に拘束されることを嫌い、テレビのチャンネルを切り替えるように人間関係のオン・オフを自在に切り替えるコミュニケーション形態であるとしている。
- (6) 例えば、昼間は対面で話し、別れてからは携帯電話で話し、帰宅したら固定電話で話をするといった、一日中何らかの形で連絡を取り合っているような関係である。
- (7) 携帯電話のメール(相手の事情を気にせず、24時間好きな時に連絡をとれる)ことに慣れてしまうと、孤独に耐えたり自己を見つめたりする機会が奪われるのではないかと指摘している。
- (8) 辻は、調査分析の結果から、携帯メールの利用頻度と孤独不安とが正の相関を示しており、関係性の流動化による社会的な不確実状況への適応として、関係性への敏感さが求められつつ、そのことがまた関係性の不安の感じやすさにつながっているものと解釈できる、と論じている。
- (9) 下田によると、学校裏サイトは2002年頃からその存在が確認されており、2007年時点で約1万5000もの学校裏サイトが存在していると推計している。
- (10) 吉光・河又によると、携帯電話やインターネットの利用で作られる人間関係が、家庭や学校以外の場所における安心感や自尊心を高める効果を持っている一方、家庭や学校での安心感にマイナスの影響をもたらすことが明らかになったという。
- (11) 松下によると、特に携帯電話のメール機能が「絶え間なき交信」を実現させているが、同時に「絶え間なき交信」はコミュニケーションの強制や返信がないことへの不安も生み出されている、とも指摘している。
- (12) 落合・佐藤によると、中学生では友人関係は一緒にいる仲間として機能しているが大学生のそれは単なる行動を共にする仲

間ではなく心理的な支えとなっており、高校生は青年期内における友人関係の大きな転換期にあたっているという。

- (13) 通話は、かける回数とかかってくる回数の合計とし、アプリの通話機能も含んでいる。メールは、送信回数と受信回数の合計とし、メール作成の時間も含め、アプリのメール(文字メッセージ)機能も含んでいる。その他は、主にインターネット上のサイトの利用を指している。
- (14) 当該アプリを利用している者のうち、利用時間の回答者のみの平均という意味であり、全体の平均値ではない。
- (15) 本稿では、文字を用いたメッセージの交換はメールの交換として集計している。LINEには文字を使って会話ができる「チャット」と呼ばれる機能があり、これはメールの送受信に含めて集計しているため、回数が多くカウントされる傾向にある。
- (16) これらのサービスを利用するためにはアカウントの登録や会員になる必要があるものもあるが、会員登録していなくてもアクセスしていれば利用しているものと見なした。

## 参考文献

- 1) 落合良行・佐藤有耕(1996):青年期における友達とのつきあい方の発達的变化,『教育心理学研究』44(1),日本教育心理学会,pp.55-65.
- 2) 松田美佐・富田英典ほか(1998):移動体メディアの普及と変容,『東京大学社会情報研究所紀要』56,東京大学社会情報研究所,pp.89-107.
- 3) 辻大介(1999):若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア,『子ども・青少年とコミュニケーション』,北樹出版.
- 4) 中島一郎・姫野桂一ほか(1999):携帯電話の普及とその社会的意味,『情報通信学会誌』59,情報通信学会,pp.46-73.
- 5) 中村功(1999):電話コミュニティ その実態とコミュニケーションの重層性について,『松山大学論集』11(4),松山大学学術研究会,pp.307-328.
- 6) 松田美佐(2001):大学生の携帯電話・電子メール利用状況2001,『情報研究』26,文教大学情報学部,pp.167-179.
- 7) 辻泉(2003):携帯電話を元にした拡大パーソナル・ネットワーク調査の試み 若者の友人関係をを中心に,『社会情報学研究』(7),日本社会情報学会,pp.97-111.
- 8) 中村功(2003):携帯メールと孤独,『松山大学論集』14(6),松山大学学術研究会,pp.85-116.
- 9) 辻大介(2006):つながりの不安と形態メール,『関西大学社会学部紀要』37(2),pp.43-52.
- 10) 毛利康秀(2007):高校生世代における携帯電話の利用実態に関する比較分析,『日本社会情報学会 第22回全国大会研究発表論文集』pp.82-85.
- 11) 下田博次(2008):『学校裏サイト』,東洋経済新報社.
- 12) 吉光正絵・河又貴洋(2009):ケータイ・ネット社会における安心・安全に関する研究 長崎県下の高校生の利用実態と対応,『日本社会情報学会全国大会研究発表論文集』24,pp.64-67.
- 13) 毛利康秀(2011):高校生の携帯電話利用に関する普及時期別の比較分析,『2011年日本社会情報学会 JSIS&JASI 合同研究大会 研究発表論文集』pp.161-164.
- 14) 松下慶太(2012):若者とケータイ・メール文化,『ケータイ社会論』,有斐閣.
- 15) モバイル社会研究所編(2012):『ケータイ社会白書 モバイル・コミュニケーション2012-13』,中央経済社.